

<最優秀賞> 景山梨彩

・課題図書:世界の古典と賢者の知恵に学ぶ言葉の力

・タイトル:話し上手になりたいあなたへ

誰もが一度は「話し上手」になりたいと思ったことがあるのではないだろうか。飲み会で上司と会話が続かず気まずい思いをした時や、無知がばれるのが怖くてつい知ったかぶりをしてしまった時、自らの会話力のなさに失望し、「話し上手」になりたいと思った経験が私にもある。

だが解決法もわからない。そんな時この本に出会った。

本書には「話し上手」とは何か、本当の「話し上手」になるにはどうしたらいいのかが書かれているが、小手先の会話術やスピーチのテクニックを伝授するハウツー本ではない。人文学を学び、多くの古典や哲学に親しんできた著者が、老子や孔子、釈迦といった先人たちの言葉や知恵を紹介しながら、「言葉」の持つ力について紐解いていく。

「修養」「観点」「知性」「創意工夫」「傾聴」「質問」「話術」「自由」という8つの章に分けられており、前半ではものの見方や言葉に深みを持たせる方法を学び、言葉の力を養うための土台作りをする。後半に進むにつれて具体的な話術に踏み込んでいく構成だ。

読んでいると様々なことに気づかされ、だんだん自分を変えたくなってくるから不思議だ。「学ばないでいると質問も出ない。」「知っているふりをすることほど大きな無知はない。」といった文章にはっとさせられ反省する。

「奪おうとするならまず与えなさい。」これは恋愛にも役立ちそうだから実践してみよう。

「徹底した読書が自分の生き方を変える。」偉大な人物が読書に勤しんでいたというエピソードに読書欲が刺激される。

こんなふうに、言葉の悩みを根本から解決する方法を読み進めるうちに、自然と自分を見つめ直すことができる。単なる話術の教本ではなく、器の大きな人間へと成長する手助けをしてくれる本だ。人が変わると言葉に深みが増す。言葉が変わると人生が変わる。その結果「話し上手」になれるのだ。

ウイルスに脅かされている今、言葉の力について考えさせられることが多くなった。感染者への誹謗中傷など、暴力と化した言葉を目にする事もある一方で、些細な一言に救われたりもする。人との接触が減った今、言葉はさらに重みを増す。

言葉には力がある。良い力を持った言葉は感情を揺さぶる。知性溢れる会話は人を笑顔にし、思いやりのある言葉は人を優しく包み込む。そんな言葉を紡ぐためには自分を磨くことが必要だ。言葉の力を信じ、真の「話し上手」になりたいすべての人に、この本をおすすめする。



<優秀賞> 佐藤瑞生

- ・課題図書:言葉の品格
- ・タイトル:花をつける言葉

「言葉の品格」というフレーズを目にしたときに真っ先にわたしの脳裏をよぎったのは、近年凶悪化している無名の誹謗中傷によって癒し難い傷を負ったり、惜しくも命を絶ってしまった人々の顔である。匿名性はもはやインターネットの世界だけの特徴ではない。コロナウイルスの感染拡大により営業自粛を迫られるも、生活のためにやむを得ず営業している店の壁に心無い言葉を殴り書きした紙を貼る迷惑行為などは記憶に新しい。店主や従業員へのインタビュー映像をみかけるたびに、口元には乾いた笑いを浮かべながら、瞳が揺らめいてひどく動搖している複雑な表情に心が痛む。

著者は言葉を「波」「橋」「槍」「銃弾」のような目に見えるモノに例え、その温度感や機能、利鈍性というものを様々な角度から、できるだけ具体的に伝えようと試みている。さらにはほぼすべての章で過去の偉人らが残した教訓や書籍を引用し、それらが何百年も先の現在にも寸分のズレなく適応していることを示している。このような「言葉による言葉への挑戦」ともいえよう著者の姿勢は、言葉をいかようにも取り扱える時代にあって、読者に「言葉の本質や自分が使用する言葉の品位を問うてみるべきなのかもしれない」と自然に思わせる効果がある。

恥ずかしながら、本書を手にとるまでイ・ギジュ氏がどのような考え方をする人物なのか、どのようなキャリアを辿ってきたのか等の個人的な背景情報についてはまったくの無知であった。しかしながら本書を読み進めていくと、その纖細ながらも強烈な文章力を培うために費やされた膨大な時間と労苦を悟らざるを得ない。それに、本書の読みやすさや比喩表現の秀逸なことのみならず、ある時は読者のこころに吹きこむそよ風のように親和で、またある時は記憶のずっと奥にしまわっていた鐘の玲瓏たる音を響かせるような情け深い言葉の数々が既に、イ・ギジュ氏の人物そのものを表しているように感じられる。

「あなたの言葉が誰かにとって一輪の花になりますように」と著者はいう。これは本書を読了した者の発信する言葉がすらりと立つ一輪の花のように誠実であってほしい、という個人へ向けた願いであると同時に、花を育てるように言葉とじっくり向き合い、時に水の加減や日当たりを調節し、美しく咲いたそれを他者へそっと手渡すみたいに言葉が交換されるような世界になってほしい、という未来へ向けた痛切な祈りと考えられるのではないだろうか。



<優秀賞> 鈴木理恵子

- ・課題図書:世界の古典と賢者の知恵に学ぶ言葉の力
- ・タイトル:賢者の言葉が私を変える

東洋、西洋の古典と賢者の知恵が国境と時代を超えて私の手元に、言葉の力という本になってやってきた。この本は聖書の中に出でてくる東方の三賢者が星に導かれて、イエスの生まれた場所にたどりつけたように、私が進むべき道を示してくれる本である。

だれでも悩み事、嫌なこと、苦手なことはあるだろう。そんな思いを抱えている時にこの本を開いてみると、八方ふさかりで道が閉ざされた中、一本の行く道を見つけることができる。

私は人に何かを頼むことが苦手だ。さらに相手にとってあまりいい話でないことを伝えるのはもっとも気が重いことである。相手が気分を損なわないよう、どう伝えるべきか考える。洪自誠は「春風が凍土を融かし、暖気が氷を消すように、じっくり取り組むがいい。」と語っている。

この春風という響きや柔らかい暖かな単語から、重い閉ざされた雪の中から、春風の心地よい風に当たった気持ちに変えられていった。相手に助言をする時などは、この春風という言葉をまずは思い出したい。

このように言葉の力を読むと自分が変えられていくのが分かる。この本の良いところはどこかのページから読んでも内容がわかるので、その日なにげなく広げたページが、まさに今の自分の状況にピッタリということが、起こるかもしれない。

最後の章では良い話の実例が載ってあり、ブッダのチュンダへの心のこもった配慮の言葉が心にしみた。ブッダは過ちをせめることなく相手の行いを功德として称えた。このブッダの遺言という言葉の贈物を受けたチュンダは、ブッダ亡き後悲しみに暮れることなく、幸せの中で余生を過ごせただろうと想像することができた。私も良い人生を歩むために、言葉の力を信じて真心を込めて言葉を語りたい。

言葉の力は心静かにじっくりと味わいながら読める本である。喜びあふれる大きな力となるためには、最初の1ページを開いて良き生き方へと踏み出すことである。



<奨励賞> 池野宗子

- ・課題図書:言葉の品格
- ・タイトル:言葉の持つ力を気づかせてくれる一冊

「スパイダーマン、むやみに糸を発射したら、けが人が出るかもしれないぞ。被害者を出さないように注意しろ。では、任務を終えたら無事に帰還せよ！」これはスパイダーマンになりきって遊んでいる 6-7 歳の息子を帰宅させるために母親が言った言葉である。息子は「了解しました。ただちに帰還します。どうぞ」と言って、母親と帰宅したそうだ。この母親は、息子の目線に合う言葉を用いて息子を上手に現実の世界に引き戻したわけだ。

また、著者が母親に贈る財布を買いに行った時、店員に「一つだけ売れ残っていました。」と言われ、購買欲が失せてしまったエピソードも紹介されている。こんな場合、私ならば何と言うか考えてみた。「お客様、良かったですね。まだ一つだけあります。この財布はお客様が買いにいらっしゃるのを待っていたのですね。」と、私は言いたい。このように身近な例が紹介されているので、自分に引き寄せて考えることができる。表現の仕方により、印象が変わってしまう。何よりも相手の気持ちに寄り添うことが大切だと分かる。

オルタナティブ・スクールを運営するイム・ドンチャン氏は子供達の間でトラブルが起こった際に、「喧嘩するな」のような命令はしない。子供達に「君はどんな気分？」「友達はどんな気持ちだと思う？」のような質問をする。著者は「質問形式の会話は、聞き手に尊重されているという感覚を抱かせる。次第に聞き手の自発的参加を引き出しある」と述べている。つまり、相手の立場に寄り添った発言は相手の心に響き、強く作用するのだと思う。

この他、銃乱射事件哀悼式における演説で、オバマ大統領が悲しみのあまり 51 秒沈黙してしまったエピソードも紹介されている。彼の「沈黙の言葉」は追悼客の胸に深く染み渡ったそうだ。

「言葉」とは不思議な力を持っていると常々思ってきたが、本書を読んで具体的な場面での「言葉の力」を実感することができた。相手と心を通わせるために重要なことは、相手を思いやる気持ちなのだとよくわかった。つまり、それが本書のタイトルになっている「言葉の品格」なのだと思う。

SNS 等で誰もが気軽に発信できる現代では、人を傷つける言葉が発せられることが多い。そんな状況の中でこそ、各自が品格のある言葉を話すことが必要なのだ。それが著者の強い願いなのだ。著者が序文で「あなたの言葉が誰かにとって一輪の花になりますように」と述べているように。



<奨励賞> 高柳直正

- ・課題図書:言葉の品格
- ・タイトル:私らしい心通える言葉を求めて

本書を手にして、はっと気づかされた自己検証からはじめよう。HOW TO ものの売れ行きと重宝な方便として随分利用もしてきたことの反省である。「上手な面接の受け方」「読書感想文の書き方」はまだしも、スピーチも本業のはずの校長向けに「上手な校長講話のしかた」まである。自らもこうしたものを活用もしたが、面接試験の試験官をした経験では、どの受験者も判でおしたように志望動機やら尊敬する人物をよどみなく答えるには倦怠感をこらえるのがしんどかった。スピーチライターが書く総理の演説や答弁が一度でも琴線にふれたら歴史に名を留めるであろうに。

本書はそうした言葉とは真逆の、自分らしさ、誠実さ、聞く人読む人に心地よい感動や余韻を与えるその人ならではのちょっとした一言を集めたものである。ジャーナリスト出身にもその出所のバラエティに富むこと、古今東西の賢人、著名人も含みながら、ごく普通の市民や史上なんらかの業績を残しながらもいわゆる埋もれた人物を掘り起こしてとりあげているのも魅力である。博識の方には既知の名前であろうが私にとっては初めて目にする人物が多く登場する。秋適、蘇浚、李宗吾、朴斎家、成大中、洪大容、朴趾源、孫武など、この機会に辞典やネットであたってみるのも楽しい。

こうした人物の言動からひろった24のエピソードが興味深く語られる。「以聽得心」「寡言無患」「言為心声」「大言炎炎」という経典を思わせるような意表をついた章立てのもとに、漢字2字からなる身近な小見出しで示唆に富む説得力のあるエッセイ集を構成する。

尊重、傾聴、共感、反応、交渉、食事が第一講、沈黙、簡潔、肯定、鈍感、視線、陰口が第2講、人香、言行、本質、表現、関係、騒音が第3講、転換、批判、質問、未来、連結、広場が第4講のそれである。言葉に対する敬意とともに、言葉には心がこもっているべきで、人柄を反映する、借り物でない自分の言葉をもつべきだ、結果としてそれが人と人を「連結」し、過去を見つめながら未来への道をひらく、との期待と願望が伺われる。

日韓関係はいま史上最悪だと言う指摘もされる。自己の主張を控え「傾聴」し相手の痛みに「共感」でき「妥協点」を見出す。「共通点」をさぐり善悪、好惡の二分法を乗り越え、「関係」を積み重ねる。こうした未来志向の日韓関係を築くためにも、若者や市民から政治家いたるまで多くの人に読んでほしい示唆に富む好著である。



<奨励賞> 高木香奈江

- ・課題図書:世界の古典と賢者の知恵に学ぶ言葉の力
- ・タイトル:言葉の力の恩恵を受けて

はじめての悲しみなど存在しないということが、今までの私のひとつの支えだった。どんな別れを経験したとしても、病に倒れることがあっても、ひとを傷つけ、また傷つけられたとしても、それは人間が発生してから繰り返されてきた悲しみである。どこかでこの思いを知るひとが存在している、あるいは存在していたというだけで、悲しみでいっぱいの心にも、ひとかけらの安らぎを覚えたものである。「世界の古典と賢者の知恵に学ぶ言葉の力」から引用すれば、まさに『言葉はあなたと相手を、そしてあなたと世界をつなぎとめる橋』であった。言葉は内に根付く悲しみと対峙させましたが、外の世界につなぐことで、孤独と絶望に陥ることから抜け出せたのだと思う。言葉が共感という慰めをもたらしたのだ。

一冊の本との出会いも、言葉の力によるものである。

いつどこで生まれた言葉であっても、現在では翻訳の助けを借り、著名な作品を中心に容易に読むことができる。いくつかの偶然が重なり、「世界の古典と賢者の知恵に学ぶ言葉の力」という韓国の中古本が私の元に来たことは、間違いなく幸運だった。知恵に溢れた多くの言葉は、現代を生きる私たちにしばしの休息を、そして再び前に進む勇気を確実に与えている。しかし、忘れてはならないことは、本は‘与えられた’言葉ということだ。

どのような偉人・聖人の言葉から深い感銘を受けたとしても、他者から与えられた言葉と自身から湧き出た言葉では、取り除けない薄い膜のような隔たりが残るように思う。ひとは他者になれない限り、多くの言葉に触れその知恵を借りながら、新しい自身から湧き出る言葉を期待し、常に成長していく必要があるのではないだろうか。このような疑問を持つきっかけも、今日笑って生きている自分へとつないでくれたのも、いつかのあのときの‘与えられた’言葉のおかげであることを胸に刻みながら。

この世界に人間が存在し続ける限り、言葉もまた生き続ける。

いつの日か言葉を越えた感情を知るために、長い旅路の足元を照らす灯として、この本が一人でも多くのひとの傍らにあることを、願ってやまない。

